

特集 「公」から住民主体による「民」への取り組み

03

市民が協同してつくる家庭文庫ちいさな本の家

下門 直人（同志社大学商学部助教）



山田由美子氏、芹澤直子氏、
藤岡祐子氏、村上慶子氏（左から）

はじめに

日本国内にある図書館は公共性の高さからその大部分が市区町村により設置された公立図書館である。2018 年時点において国内には 3,296 の図書館があるが、そのうち都道府県立が 58 館、市区町村立が 3,219 館となっている¹⁾（学校図書館を除く）。そして私立図書館はわずか 19 館しかなく、図書館全体のうち公立が占める割合は 99% 以上である。

この公立と私立の比率はなにを意味するのであろうか。一般的に図書館のような公共性の高いサービスの提供は民間企業には不向きとされる。つまり公共財の提供は国や自治体などの政府部門が適していると考えられ、それゆえ日本の図書館の大部分は自治体により運営される公立図書館である。

その一方で、近年では佐賀県の武雄市図書館や神奈川県海老名市立中央図書館などの公立図書館の企画・運営を民間企業の CCC（カルチュラ・コンビニエンス・クラブ）が実施し、「TSUTAYA 図書館」と呼ばれ話題になっている。また本稿で言及するイトーヨーカドー子ども図書館は私立図書館でありながら地域社会に根付き、地域住民から愛される存在であった。

したがって賛否は別として民間企業だからといって図書館運営が不可能なわけではない。さらに将来的な財政問題を考えると、公立だからといって必ずしも維持されるとはいいきれないであろう。ではこれからの社会において、図書館のような公共サービスの提供主体や提供のあり方に対して何が求められているのであろうか。

こうした議論の多くは、一般的に政府（国や自治体）か民間かという二元論的な見方になりやすい。そこで本稿では別の視角、すなわち市民が参加し、つくり、提供するという視角から「家庭文庫ちいさな本の家」を対象として考えてみたい。なお、本稿の内容はちいさな本の家へのインタ



グリーンに塗られたちいさな本の家の外観

ビュー調査にもとづく。

家庭文庫「ちいさな本の家」

ちいさな本の家は、市民が提供する一軒家を利用してつくられた子どもの本の家庭文庫である。静岡県沼津市の東原ニュータウンの一角に所在し、児童図書や絵本の貸出しをおこない、その運営は利用者からの協賛金やボランティアスタッフなど地域の市民によって支えられている。

ちいさな本の家は街中から少し離れ、さらにニュータウンの奥に位置している。そのため来館者が迷わないようにという配慮から約1km手前から手作りの看板が数箇所立てられている（写真）。そして途中のお茶畑を過ぎ、住宅街を抜けるとお茶をイメージしたライトグリーンに塗られた家が現れる。それがちいさな本の家である。

ちいさな本の家は毎週土曜日の午前10時から午後3時まで開館している（第5土曜日を除く）。訪問者は平均して10人ほどであり近隣の子どもや沼津市外から訪れる親子、そして近所の年配者などである。毎週のように遊びに来る小学生や運営スタッフとおしゃべりしに来る近隣住民などもお

り、本好きな子どもや近所の人々にとって、本を読むだけでなくスタッフや利用者同士で交流ができる憩いの場となっている。またスタッフが中心となってお話し会や人形劇、工作会などのイベントを月一回開催したり、図書（児童図書）に関わる講演会や映画上映会などの企画を年に1、2回ほどおこなったりしている。こうした企画がある時は子どもたちもたくさん集まり、子どもたち同士で遊んだりスタッフと交流したりしながらにぎやかに過ごしている。

ちいさな本の家に入り最初に目に入るのは、玄関に表紙がきれいに並べられた絵本である。これらの絵本は定期的に入れ替えられ、季節やその折々に合った絵本が選書され並べられている。また絵本や児童図書に合わせた可愛い装飾や絵本の登場人物のぬいぐるみや人形が家の中にあちこちに並べられており、子どもたちが本に親しみを感じられるような仕掛けがいろいろなところにある。

さらに、家の中には凡そ3,000冊の児童図書が配架されており、世界中の子どもに読まれてきた古典的な童話シリーズや現在では入手困難な図書などが部屋いっぱいに



ちいさな本の家案内板

並べられている。そして床にはマットやクッション、椅子が置かれており、子どもがじっくり本を読み、本の世界に入り込めるような空間になっている。

ちいさな本の家は個人の家を利用した家庭文庫でありながら公立の子ども図書館や児童図書を扱う地域文庫と比べ遜色のない質の高い図書が揃えられている非常に稀有な存在である。ではどのような理由でちいさな本の家は誕生したのだろうか。

イトーヨーカドー子ども図書館の閉館と存続への住民の願い

日本経済が安定成長期に入った 1970 年代、当時のイトーヨーカ堂は社会貢献活動の一環として全国各地の店舗で「イトーヨーカドー子ども図書館」を開館した。その第一号がイトーヨーカドー沼津店であり、その反響のよさからその後全国のいくつかの店舗でも子ども図書館が開館した。

イトーヨーカドー沼津店の子ども図書館は地域の人々、とりわけ親子に愛されながら長年運営されてきた。スーパーであるイトーヨーカドー内に設置されていたため、買い物ついでに利用したり、親が買物している間に子どもが本を読んで待つことができたりと子どもや子育て世代の親にとって使い勝手のよい図書館として愛されてきた。とりわけ、入園・入学前の子どもをかかえる母親は昼間も子どもと家にこもりがちになってしまい、孤立感を感じたり無自覚なストレスを抱えてしまったりしてしまう場合が多い。そうした親にとって子ども図書館はリラックスできる場であり救いの場でもあった。

このように地域の人々から愛されながら利用されていたイトーヨーカドー子ども図

書館は、その開館及び運営に童話屋（絵本や詩集を専門に扱う出版社）と当時童話屋の代表を務めていた田中和雄氏が深く関わっている（当時、田中氏がどのような思いで子ども図書館に携わっていたかは本稿最後の田中氏の寄稿を参照のこと）。田中氏は子どもたちによい本を届け、本を好きになってもらいたいという思いから選書や配架など子ども図書館づくりに尽力してきた。

しかしイトーヨーカ堂の経営判断や童話屋の協力のもと運営されてきた子ども図書館ではあったが、イトーヨーカ堂の経営上の理由や来館者数の減少を背景として、2009 年に沼津店をはじめ全国のイトーヨーカドー子ども図書館が閉館されることになった。

イトーヨーカドー子ども図書館はイトーヨーカ堂という企業が開設した私立図書館ではあったが、31 年間もの間、地域の図書館として受け入れられ利用されてきた。そのため現在の親世代が子どもの頃に利用していたという人もおり、子ども図書館の閉館は子どもをはじめ大人まで地域の人々に大きな衝撃を与えた。

この閉館を契機として、子ども図書館の存続を願う親たちやそこで読み聞かせの本の相談をしていたメンバーが中心となって「ぬまづ子ども図書館応援団」を組織し、子ども図書館の利用者や近隣の幼稚園・保育園、小中学校の PTA などに子ども図書館存続に関するアンケート調査を実施した。さらにそのアンケート結果と図書館存続の要望書をもって沼津市役所の担当者や当時の市長に面会し、子ども図書館の存続への思いや願いを直接伝えている。その時の中心メンバーの一人がちいさな本を家の設立にも大きく貢献した山田氏や芹澤氏たちである。

こうした市民による活動が転機となって、沼津市は2010年に沼津っ子ふれあいセンター（沼津市の子育て支援施設）の一角に「沼津こども図書室パタポン（以下、パタポン）」を新たに開設した。そしてイトーヨーカドー子ども図書館の所蔵図書はパタポンに引き継がれた。つまり2009年9月に地域住民から惜しまれながら閉館したイトーヨーカドー子ども図書館だが、利用者や市民の活動によって半年も経たない2010年2月にパタポンとして再スタートすることができた。さらにパタポンは子ども図書館設立時の哲学や思いも引き継ぎながら、時代に合った選書を通じて地域の人々に愛着をもって受け入れられる図書室となることが目指された。イトーヨーカドー子ども図書館時代から英語の絵本も所蔵することから、近年は外国人の親子グループの利用も増えてきている。

ただ残念なことに図書室のスペースの制約上、パタポンはイトーヨーカドー子ども図書館所蔵の図書のうち絵本を中心に配架されており、大部分の児童図書については配架できずに倉庫に眠ったままとなっていた。さらにそれらの児童図書をパタポンで保管することが徐々に困難になり、新たに児童書を受け入れてくれる図書館や施設を探さなければならない事態となってしまった。そのような課題の解決を目指して活動するなかで誕生したのが家庭文庫「ちいさな本の家」である。

「ちいさな本の家」誕生

(1) 図書館づくり奮闘記

イトーヨーカドー子ども図書館の存続問題は、絵本に関してはパタポンに引き継がれたことで一定程度解決したが、絵本以外の児童図書についてはその問題は解決され

ないままであった。さらに、パタポンでもスペースの関係上いつまでも児童図書を保管することが困難であり、そのため今度は児童図書の引継ぎ先を探さなければならないという問題が新たに生まれてきた。

そしてその問題の解決に向けて活動してきたのが市民グループ「パタポン友の会」である。パタポン友の会はイトーヨーカドー子ども図書館の存続問題に立ち上がった親や、そこを子どもたちへの読み聞かせの基地としていたボランティアの人々が中心となって活動していたぬまづ子ども図書館をつくる会が発展してできた組織である。

パタポン友の会は児童図書の受け入れ先として公立図書館や学校図書館、そして公民館等の公共施設の一部を図書室とする地域文庫の創設などの案を考え、その実現に向けて関係者への相談や交渉を積極的におこなった。しかし、それらのアイデアは最終的に実現されなかった。その理由は、子ども図書館の創設や選書、運営に深く関わった童話屋の田中氏の思いを引き継ぎたいという強い思いがメンバーにあったためである。たとえば、読者のことを考えシリーズになった図書や統一的に揃えられた図書を異なる図書館や地域文庫にバラバラに取り取ってもらうことを避けようとしていた。したがって児童図書の受け入れ先が図書のみならず子ども図書館の運営方針や理念をも理解し、継承してくれることを望んでいたため受け入れ先探しは一層困難であった。

そうした状況のなか、「沼津子どもの本を学ぶ会」で山田氏たちと一緒に活動してきた村上氏が児童図書の受け入れ先を探していることを知り、その当時使っていなかった一軒家の提供を提案してくれた。そしてそれがきっかけとなり、新たな解決策



上：ちいさな本の家に運搬されてきた児童図書
下：背の低い本棚に並べられた児童図書

上：絵本用の本棚をつくる山田氏
下：絵本の表紙がみえる絵本用本棚

として出てきたアイデアが図書館を自分たちの手でつくるというものであった。

これにより場所の問題は解決した。だがちいさな本の家を開館するためにはまだいくつかの課題が残されていた。その一つが大量の児童書や絵本をいれる書架の調達問題であった。

図書館で使われる本棚は重い本を数百冊いれても棚が歪まないような堅牢性が求められる。ただそうした本棚は非常に高価であり、簡単に揃えられるものではない。その上、子ども図書館では子どもが利用しやすい背の低い児童図書用の本棚と、絵本の表紙が見える本棚が必要とされるため少し

特殊な本棚を揃える必要があった。それらのうち背の低い本棚はイトーヨーカドー子ども図書館から引き継げたが、絵本用の本棚はパタポンで使用されていたため新たに調達しなければならなかった。

しかし、ちいさな本の家はボランティアや有志が自分たちでできることを持ち寄って開館の準備が進められていたため、新しく絵本用の本棚を購入する資金的な余裕はなかった。そこで絵本用の本棚については自分たちでつくることになり、山田氏や村上氏らが中心となって本棚を一から作り、それ以外の様々な準備も試行錯誤しながら進めてきた(写真)。そうした努力の上に、

2016年5月に家庭文庫ちいさな本の家は開館した。

またちいさな本の家の開館準備が進められていることを知った童話屋の田中氏は利用者子どもたちに本の世界を楽しんでもらいたいという思いから絵本に登場する人物や動物のぬいぐるみを送ったり、児童図書館の魅力を大人にも理解してもらいたいとの思いから積極的に講演を引き受けたりしている。

つまり、ちいさな本の家は村上氏による自宅の提供や山田氏をはじめとした市民グループ、そしてイトーヨーカドー子ども図書館の時代から関わってきた童話屋の田中氏など様々な人々の努力とサポートによって誕生することができたといえよう。

(2) 運営と利用者との出会い

ちいさな本の家は、家庭文庫として一軒家を貸している村上氏とボランティアスタッフの山田氏、藤岡氏、芹沢氏、須藤氏、増村氏の6人によって運営されている。スタッフは皆が児童文学や絵本、そして子どもと関わるのが好きということもあり、普段の仕事もそれらに関連している。たとえば、学童クラブや学校図書館の職員として働いていたり幼稚園や公共施設等で読み聞かせをおこなっていたりする。

スタッフは平日にそれらの仕事をしているためちいさな本の家を平日に開館することが難しく、開館日は毎週土曜となっている。ただスタッフの間では、学校帰りに気軽に寄ってもらいたいという思いや、様々な理由で学校に行かなかったり行けなかったりする子どもたちの居場所としてちいさな本の家を活用したという思いもあり、そうした簡単には解決できない課題なども含めてスタッフ同士で日頃から相談しながら運営している。

利用者にとってちいさな本の家は居心地のよい場所となっている。利用者の多くは小学生であり、彼らは読み聞かせや人形劇、工作会などのイベントがあるときは当然たくさん集まるが、イベントがなくてもスタッフや他の利用者と遊ぶために来ることも多い。さらに小学生以外にも近所の年配者などが頻繁に訪れられる場ともなっており、普段はなかなか接点のない小学生と近所の年配者との交流も生まれている。ただ通ってくれている小学生の多くは中学生になると足が遠のく傾向にある。たとえば、小学生の間は毎週来ていた子が中学生になると同時にとたまにしか遊びに来なかったり全く来なくなってしまったりする。スタッフたちにとっては中学生になって来なくなってしまう子がいるとそれに寂しさを感じることもあるが、その一方でそうしたちいさな本の家を卒業する子どもも含めて子どもたちの成長を目にすることが喜びとなっている。またスタッフが利用者子どもと街中で偶然出会ったときに子どもが声をかけてくれることもあり、ちいさな本の家に関わっていて嬉しく感じるという。したがって、ちいさな本の家のスタッフにとって、運営上は資金面での苦労や仕事との両立などにおいて大変な側面がある一方で、児童図書や絵本を通じた人との出会いが大きなモチベーションになっていることがうかがえる。

おわりに

イトーヨーカ堂が社会貢献事業として始めたイトーヨーカドー子ども図書館は、民間企業が設置した私立図書館でありながら31年間も事業として継続し、その長い歴史の中で地元の人々に受け入れられ地域の



読み聞かせをおこなう村上氏



本棚のまわりに飾ってある
『ふたりはともだち』の主人公のカエルの人形

親子に愛されていた。このことはたとえ民間企業であっても図書館のような公共サービスの提供において重要な役割を担えるということを示しているように思われる。しかしその事業の継続性という点において、イトーヨーカ堂の本業の経営状況に影響されざるを得ないという限界をもつ。

それに対して、本稿で取り上げたちいさな本の家は、市民グループが子ども図書館存続のために活動するなかで偶然みつけた解決策として誕生した家庭文庫である。そのため運営スタッフは普段仕事をもつボランティアや有志であり、それゆえ公立の図書館のように週6日や毎日開館させることは難しい。ただその一方で、スタッフと利用者との距離がちかかったり、多世代間で

の多様な交流が生まれたりする場所となっている。

したがって、ちいさな本の家は公立図書館とも企業が運営する私立図書館とも異なる市民が協同してつくる図書館(家庭文庫)として、そして規模が小さいがゆえに多様な交流が生まれる場として独自の立ち位置を示しているように思われる。

注)

- 1) 日本図書館協会ホームページ「日本の図書館統計」(<http://www.jla.or.jp/library/statistics/tabid/94/Default.aspx>, 2019年5月30日アクセス)

夢の子ども図書館 (寄稿)

田中和雄 (株式会社童話屋 前代表)

イトーヨーカ堂子ども図書館は、40年前大規模量販店の出店規制対策から生まれた遊休スペース活用のアイデアです。1978年の沼津館を皮切りに全国16館が順次オープン。利用者延べ2千万人、貸出冊集1千万冊と好評でした。2009年本体の業績不振で16館はすべて閉館。沼津と秋田は行政の理解で今も継続されています。

生まれたきっかけは、東京渋谷の童話屋書店を訪れたヨーカ堂の企画担当者が、田中から子ども図書館の夢を聞いて共感したことからでした。その3ヶ月後に沼津で第1号館が生まれました。60坪の売場スペースに3千冊の児童書でスタート。利用者に喜ばれ、10日で書棚が空になる盛況でした。

利用資格は自分の名前と住所が名乗れるひと。年齢も地域も制限なしにしました。「本を読みたいひと」の善意を大切にした

いと考えた上で決めました。

田中の夢は「子どもの本の花園」を創ることでした。夢を実現するコンセプトは3つです。一つは選書です。子どもが人生の初めに出会う本はオッパイと同じです。だれもが赤ちゃんには最高のオッパイをあげたいと思うでしょう。幼い子どもの心の主人（あるじ）を善にするのは善い本です。どの一冊も子どもの幸せな人生を願って大人が選ぶ責任があるのです。

二つめは「絵本架」です。絵本架はもちろん木で作ります。ここではどの絵本も表紙を見せて並べます。表紙は絵本の顔です。木のぬくもりに囲まれて絵本が笑って子どもを迎えます。高さは120cm。3歳の子どもの手が届き、下の棚は赤ちゃんも本がとれます。人気のある「ぐりとぐら」や「おだんごぱん」などは複本が3～4冊入る巾があります。これなら「今日は借りられていてありません」はありません。読物の本の高さは180cmですが横幅は60cmと短くしました。背表紙にタテに描かれたタイトルをヨコに読んでいくと疲れるので30cm 短くしたのです。

三つめは、子どもと子どもの本が好きな専門の司書とベテランのパートの女性が常にいること。欧米では国家試験をパスした児童図書館員が必ず配備されています。司書たちの仕事の第一は、来館した子どもの名前をいち早く覚えること。次に来館したときに「和雄くん」なんて呼ばれたら和雄くんはいっぺんで本好きになってしまいます。次の仕事は「今日は何を読もうか」です。とにかく子どもをとっつかまえて本を読んであげる、それが大事な仕事です。求められれば何冊でも読んであげます。でもただ読むだけでなくお話の深いところを知って読むことが大切です。そこで年1～2回東京に集って、田中が講師役で勉強会をし

ました。月1回は1冊の絵本を全員が読んで、どこが良かったか、どう面白かったかについて手紙を書き、田中が返事を書くという勉強を続けました。

小さなお話会は毎日、大きなお話会は週1回やりました。ときには谷川俊太郎さんを連れてきて田中と対談したりすると、千人を超すお客さままで賑わうこともありました。

司書とパートの人の待遇は一般企業並み。20年以上も勤めてくれた人もいます。ここで育ってお母さんになり子連れでくる読者もいました。閉館を悲しみ直接ヨカ堂さんに働きかけてくれた人たちもたくさんいました。そういう人たちと司書、パートさんとで今も同窓会が開かれています。沼津の「ちいさな本の家」は存在自体が、多くの夢みた子ども図書館と同じ志です。末永く続くことを期待しています。

イトーヨーカ堂子ども図書館は、子どもたちが良い本と出会う花園を夢みた30年でした。夢は今も各地で生きています。



小さな本を家の玄関